

一七十パーセントぐらいではないでしょうか。偉人、天才と言われる人は、興味と愛情とに乗つて、普通の人の何倍かの努力をしている人々です。結局、使つた総合時間が人生の結果になつて出て來るとも言われましょう。勿論、種々の環境があり、そう簡単ではありませんか、覺悟を決めて、人の何倍かの努力を笑つて楽しんで、仕事に向けるという實行が伴うなら、まず世間で優れた人の爲したことぐらひは、誰にでも出来るはずだと思ひます。ルオーは八十六歳で亡くなつたが、全く努力の人でありました。病氣になり仕事を禁ぜられたとき、「仕事を止めることは私には出來ない」と言つて畫室へはいつて行つたといふことです。繪筆を持つことが彼の生活であります。またキリスト傳の著者ルナンは「仕事をする事、そのことが我々に安らぎを與える」と言つています。これは本來隨意的行動であつたのが反射的になり習慣になるといふことであります。

最後に、長生の祕訣は新聞雜誌などでは、各人各様にいろいろのことがあげられていますが、しかし、これらは多くは眞の原因ではなし、各人の好みでしかありません。長生に共通なのは精神的安定です。精神的動搖がある瞬間に、その度に腦下垂體に興奮が起り、それが副腎に移り、そこから瞬間に三十數種のホルモンの分泌が變ると内分泌學説では申します。精神の不安定は身體内の平均を破ります。生れつきもありませんが、精神的に亂れないといふことは長生の最も大切な共通原因の一つです。私共は何よりも精神的安定を大切にしなければなりません。

皆さん、私共は大自然から與えられた第一次生命に心から感

謝し、この上に知性に輝く第二次生命を築きあげたいものであります。御静聴ありがとうございました。

宗教的信仰における神話の意義

本學教授 坂本 弘

神話は宗教にとつて單に搖籃的な意味をもつだけではない。それは、いわゆる原始宗教や國家宗教においてのみならず、超越的聖を目ざす高次元の宗教においても、さまざまな仕方でもつよく生きてゐる。とくに、救濟論的宗教における神話的説示は信仰の核心に觸れる重要性を示している。この點について少しく省察をこころみたい。

まず、そのような神話的説示について、次の二點を注意したい。(一) それは、信ずる者にとつて、もはや人間的想像の所産ではなく、靈感的・啓示的な眞實である。(二) のみならず、それは實存の決意と應答とを要求するものである。信仰を通じて人間が應答し關與しきたることを求めるものである。このようにして、それは信仰を通じて反復され更新さるべき原事實・起動的事實を意味する。この性格はすでに神話そのものに含蓄されているのであるが、救濟論的宗教の神話的説示において際立つてあらわとなる。

これだけを見定めておいて、ここでは、そのような神話的説示の典型として、「受難の神話」ともいふべきものを取りあげ、それに觸れて神話的説示の宗教的・實存論的意義を考えて

みたいとおもう。ここでおそらく直ちに思い起されるのは、キリスト教における十字架のできごとについての教え、すなわちキリストの贖罪の教えであり、またその發想の系譜においてそれに先行する古代オリエント及びギリシア・ローマの死して甦る神々の神話と祭祀とであるが、聖なる受難のテーマそのものは、これら一連の神話に限られるのではなく、舊くから絶えず姿をかえては立ち現われる人心に深く根をおろした永遠な神話の主題の一つであるということができよう。また、衰退した諸種の神話の間にあつて、今なお人を動かしか考えさせる力を失わない活きた神話的テーマの一つであるということができよう。ではその動かし考えさせる力はどこから来るのであろうか。

まず考えられるのは苦難・苦惱の性格である。苦難・苦惱をよるこび欲する者はどこにもいない。にもかかわらず、それは人生から除去されえない。のみならず苦難・苦惱は深く眞摯に考えさせる力をもつ。人間は苦難に無關心たりえない。かくして苦難そのものが宗教と哲學との永遠のテーマなのである。

では、そのような神話が姿を現わしはじめた古代的思考において苦難はどのように考えられたか。學者たちによつて注意されているように、受難が偶然に、或は自然的原因によつて起るなどというところは考えられないことであつた。それは、惡意の呪術によつて仕掛けられるか、禁忌を犯すか、神々の怒りに觸れるか、そのいずれでもない場合は、測りがたい至上神の意志によつて起ると考えられた。苦難の原因はすべて意志的なもの或は行爲的なものことばで考えられたのである。このようにして、苦難を身に受けるということは、他者の惡意の呪術に起

因するのでないかぎり、身の罪咎を償い果すという意味を持つている。しかも、他面、この償いには身代りを立てることができたのである。供犠の行いにはしばしばその意味がある。かくして、動物のみならず人間も亦、そして無垢な幼い生命までが身代りの受難死に立たされるといふようなことが、少くとも紀元前七世紀頃までは頻々として行われたのである。そのような受難にかかわる心事は、たとえば、その祈誓の故に一人娘をヤーヴェに捧げねばならなかつたエフタ父娘の嘆きにも表現されている。

このような苦難についての、罪咎についての、また犠牲による償いについての長きにわたる累積された經驗と記憶とがあれども、聖なるものの側からする「償い」の受難による救いの教えは胸奥に迫る力をもち得たのである。原始キリスト教の福音とそれへの應答とは、この背景なくしては考えることはできないであらう。しかし、その胸奥に迫る力とはどのようなものであろうか。たしかに神話的説示の背後には今瞥見したような近代的心性にとつてはすでに異質化した思考方法がある。にもかかわらず、ことばや筋の當面のすがたをこえて、聖なる受難の説示には遡ることのない一つの眞實が開示されていると思われる。すなわち、それは、救いが受難受苦という人間の運命と根深くからみ合う人間の自己中心性を照明するとともに、これを貫き通すようにして來るものであること、したがつて、それは無限の謙虛さをもつて立ち上ることを要求するものであることを告知しているように思われる。「償い」というても、それは文字通りの償い以上のもの、それとは(九三頁下段へ)

他力の行信に於てのみ全現し、業果に苦惱する如何なる現實をも、他力の行信の自覺に於て純一に絕對現實として、慚愧の眞只中に、眞實の歡喜を生れしめる他力廻向の自覺である。「信」は眞實の他力の聞受である。大智―大悲―(他力)―聞信―稱名の關係は他力廻向を中核として現成して行く。即ち、他力とは我々を佛にせずんば止まない力であるが、現實的には他力とは無限の意味を示す超越的な一面を持つ。併しそれと同時にその大悲性の故に只我々はその願力の深さをたどつて、一切の人々が、皆佛様に見える様な自分に成ることを期し得るのであり、往生淨土と云ふ深い意味に於て、それ／＼の現實に慚愧し、又歡喜出來るところに他力の働きをいただいて行けるのである。まことに他力の行信たる稱名念佛の意味は限り無く、深く、そして現實的なのである。

(七〇頁下段より)

次元を異にするものである。

では、われわれは、神話的説示に代つて救濟論的眞實を、より直截に、つねに一義的な明晰さをもつて表現する説示の様式を考へることが出来るであろうか。神話的説示を全面的に排除し去ることが出来るであろうか。おそらくは否である。そのうつたえの力において、エレメンタルな力と統一とをもつ神話的説示に代りうるものがあるとは思われない。神話に代りうるものは結局神話である。そのような神話についてなしうることは、その排除ではなく、そこに秘められている意味を不斷に新しく自覺化して行くことであろう。